

実証実験の目的

実証実験の目的 ①

・「個品別検証」、「プロセス(システム)認証」、「要員認証」の3つのスキームを対象とし、それぞれのスキームにおいて、下記の2つの側面を評価・検証する。

(1) 情報のコミュニケーションにおける信頼性・透明性の維持・確保

- 必要な信頼性及び透明性を確保することができるか(可能性)
- 信頼性・透明性を確保するためには必要となる条件は何か
(公開の要求事項を高める、サーベイランスを行う、検証員の課す力量の向上など)

(2) 検証にかかるコストと時間の最適化

- 必要となるコストと時間

これらを検討・実証した上で、事業者が検証を受ける際に適したスキームを検討することが本実証・実験WGの目的となる。

・合わせて各スキームの実証実験を通して、それぞれのスキームに必要な文書体系を構築することも目的とする。

実証実験の目的 ②

■ 個品別検証の実証実験の目的 <検証の品質の差をいかに少なくできるか>

- ・個品別検証では、どの検証員が検証をしても、同様の算定結果が担保され、十分な説明ができることが、制度の信頼性の確保につながる。
- ・そのためには、検証員に一定の水準の力量を求めることが必要となる。
- ・一定の力量の基準と研修プログラム・検証ガイドラインを作成することで、検証員によるCFP算定結果に差が生じなくなることの実証を目的とする。

→ 求められる力量・研修プログラム・検証ガイドラインを構築→実証→課題抽出

■ プロセス(システム)認証の実証実験の目的 <適切な信頼性を確保した認証方式となるか>

- ・プロセスの構築／第三者による認定＋内部検証により、個品別検証(外部検証＋パネル)と同等の信頼性を担保できる可能性を検証しておく必要がある。
- ・そのため、プロセスを認証するための要求基準を作成し、実際に社内にシステムを構築
 - ・認証した上で、そのプロセスから信頼性の高い数値導出が可能であることを確認する。
- ・内部検証のガイドライン、プロセス認証(システム審査)のガイドラインを作成することで、プロセスにより信頼性の高い数値の導出が可能であることを確認する。

→ 求められるシステムの要求基準・認証ガイドラインを作成→実証→課題抽出

実証実験の目的 ③

■要員認証の実証実験の目的<算定結果の信頼性が担保されるか>

- ・要員認証では、信頼性の確保と同時に第一者検証となることから結果の透明性を担保する手段が必要と考えられる。また、自己適合宣言に近い形式についての要求についても把握する。

1)要員認証の必要性について

- ・コストや検証にかかる時間の観点から、事業者側でのメリットがある。
- ・一方で、自己宣言に近い形式のラベルで信頼性やリスク(事業者・プログラムオーナー)の観点では、第三者検証による方式に比べ課題があるものと考えられる。この方式に関する事業者の考えなどを把握し、要員認証の実現性を整理する。

2) 信頼性の検証(実証実験を実施)

- ・要員認証では、個品別検証と同様に、検証員の一定の力量を求めることが必要となる。
- ・ある力量基準と研修プログラム・内部検証のガイドラインを作成することで、CFP算定結果に差が生じなくなることを実証を目的とする。
- ・生じる課題が、個品別検証と異なる場合には、要員認証自体が技術的に不可能であるか、求められる力量に差があることになる。

→ **求められる力量・研修プログラム・検証ガイドラインを構築→実証→課題抽出**

(原則個品別検証と同じ、ただし検証員は企業内部から募集する)

3) 透明性の確保に関する議論

- ・第一者検証であることから、個品別検証と同等の透明性を確保するための施策を検討し、施策の候補を整理することを目的とする。